

## 11 .アーバニズムの下位文化理論

### ( 1 ) アーバニズムの理論 ( Fischer 1984 の整理 )

都市はわれわれの生活をどのように変えるのか？

#### 生態学的決定理論

都市がコミュニティを衰退させ、人びとの生活を孤立と疎外へみちびく ( Wirth 1938 )。

#### 社会構成理論

都市住民の生活様式を規定しているのは、都市そのものではなく、都市の社会構成。都市住民の社会的属性 ( 社会的地位 ) が、生活様式を規定している ( Gans 1962a )。

#### 下位文化理論

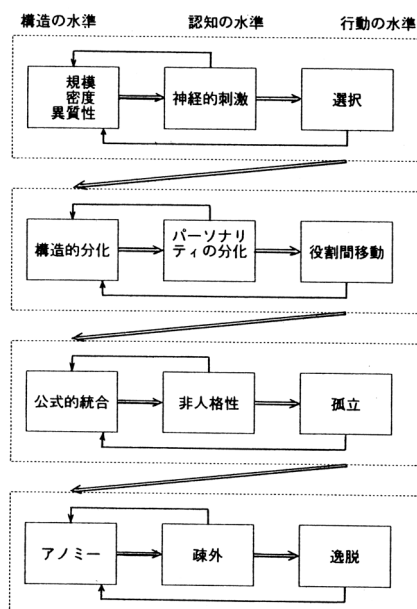
社会構成だけではなく、都市そのものも、都市住民の生活様式を規定している。ただし、都市はコミュニティを衰退させるのではなく、新しい下位文化を育てる ( Fischer 1975 )。

### ( 2 ) フィッシャーによるワース批判

「生活様式としてのアーバニズム」 ( Fischer 1972 )

ワースのモデルを、個人の水準と構造の水準を往復する「逐次因果ブロックモデル」として整理。従来の研究を検討して、ワース仮説がどこまで支持されているかを調べる。

図1 ワースの「生活様式としてのアーバニズム」のモデル ( Fischer,1972:190)



否定された項目

公式的統合、非人格性、孤立、不安感

留保された項目

神経的刺激、選択、パーソナリティの分化、役割間移動、アノミー、疎外

いずれも証拠不十分。

支持された項目

構造的分化（役割の分化、ネットワークの分節化）、逸脱

代案

- 1)生態学的要因を社会的要因に置き換える。
- 2)分析水準を全体社会におく。
- 3)適用範囲を限定化する。
- 4)収斂理論：近代化が進むにつれて、都市と村落の差がなくなる。
- 5)都市下位文化

社会的要因に加えて、生態学的要因も見られる。

構造的分化に支えられて、逸脱が起こる。

下位文化理論

都市に見られる生活様式は、都市の社会構成によって規定されるが、同時に、都市の規模も非通念的な下位文化の形成に寄与する。

議論の焦点は、都市が独自の社会的・心理的效果をもつかどうか。

都市はいかなる社会的・心理的效果をもつか。

(3) 下位文化理論の定式化

フィッシャー「アーバニズムの下位文化理論をめざして」(Fischer 1975)

都市の定義：人口の集中している場所

下位文化の定義：外社会から相対的に区別された社会的ネットワークとそれに結びついた特徴的な価値、規範、習慣。

命題1 地域が都市的であればあるほど、下位文化の多様性は増大する。

理由 規模 構造的分化(選択的接触) 新しい社会的ネットワークの形成。  
都市の拡大 人口の流入 都市内部の人口の多様性。

命題2 地域が都市的であればあるほど、下位文化の強度は増大する。

理由 臨界量の達成 制度の完備 下位文化の強化  
文化的衝突 下位文化の強化

命題3 地域が都市的であればあるほど、伝播(普及)の源泉が増加し、下位文化への伝播が増大する。

理由：下位文化相互の接触による伝播。

「下位文化の強化という都市的過程は、文化の伝播というもうひとつの過程に抗して作用する」(Ibid. p.1327 = 訳 p.65)

命題4 地域が都市的であればあるほど、非通念性の率が増大する。

理由 下位文化の多様性(命題1) 非通念的行動が増加する。  
下位文化の強化(命題2) 非通念的行動が増加する。  
下位文化の伝播(命題3) 非通念的行動が増加する(文化の組み替え)

下位文化の強化と伝播の対抗作用について

命題5(a) 所与の下位文化にとって、アーバニズムが引き起こす伝播の結果は、中心的な項目よりもむしろ周辺的で重要でない項目に現れる。

例：自転車と信念、服装の好みと世界観

命題5 (b) 長期にわたってアーバニズムが増大するとき、外部要素の伝播は下位文化の強化の過程に遅れて進行する。

命題6 都市の非通念性は、普遍的な方向性をとることはない。

「ワース理論とは違って、都市がなぜ合理主義や世俗主義や普遍主義のような方向に逸脱しなければならないかについて、ア・プリアリな理由は存在しない。必要なのは、都市は典型的な標準とは異なるということだけである」(Ibid., p.1335)

命題7 都市の人びとと村落の人びととの間には、依然として文化的な違いがある。

「革新的な下位文化を支えるのに規模が重要であるということは、都市はつねにこの点に関して有利であることを意味している。村落地域が新しい価値を採用し、それを一般的な規範にしてしまうそのときにおいてさえ、都市ではそれとは異なる価値が生じつつある」(p.1336)

「つねに革新と変化を育むのが、アーバニズムの性質なのである」(Ibid., p.1336)

「基本的には、理論的探究の出発点となった問題である都市生活の『非通念性』が説明された。

このモデルでは、ワース流のメカニズムに依拠した説明をしていない。そこには、アーバニズムが疎外、孤立、非人格性、皮相性、ストレスや緊張、不安、冷酷などを生み出すと言明するいかなる命題も存在しない」(Ibid., p.1337)。

「この理論は、コミュニティの『道徳的秩序』に関して重要な問題を提起している。ここで提示した分析に暗にふくまれているのは、つぎのような主張である。すなわち、大都市は、市民が共通の『社会的世界』をもつことで統合されているわけでもなければ、アノミイ的な『大衆社会』のフォーマルな手段によって統合されているわけでもないということだ。それなら、都市はどのように統合されているのだろうか。ある程度までは、都市は統合されていない。つまり、大きなコミュニティでは、小さなコミュニティよりも、価値の合意は存在しにくい。満場一致というよりは、「百家争鳴」の状況にある。詳しく立ち入ることはできないが、現に存在している統合は、多様な下位文化の間に行われる交換や交渉や紛争等にもとづくものであると示唆したい」(Ibid., p.1337)

「ここで提出した理論は、都市の『悪』と『善』を同時に説明しようとしている。犯罪的な非通念性と革新的な非通念性(たとえば芸術)は、ともに活気に満ちた下位文化から生み出されてくるのである。両者は同じ力学から生み出されてくるのだから、前者なしに後者を達成することはむずかしい。ことによると、この結論は人を喜ばせるようなものではないかもしれない」(Ibid., p.1337-8)